

11. わが子に最善つくせ

結果は天命を待つのみ

灰色雁の飼育で世界的に有名な動物学者、コンラード・ローレンツ博士の実験報告によりますと、「三つの水槽

の生物に、同時に同じ肥料を入れて同じように育てても、その結果が三つとも全く異なった状態になることがある」と言っています。

例えば、三つの水槽に全く同じように二種類の藻を入れて、それを全く同一の条件で育てた場合でも、Aの水槽では片方の藻だけが勢いよく茂り、他方の藻はそれに圧倒されてしまっています。

ところが、Bの水槽では勢力の状態がAの水槽と全く反対になっているのです。しかもCの水槽では、両者の勢いが全く均衡していて、適当に共存している、……というように、三者が三様になることがある、というのです。

このような事実があるのです。だから、「同じように育てたのに、兄は良い子に育ち、弟は悪い子になった」という親の嘆きをよく耳にしますが、人間の成長には、藻の成長などよりもずっと複雑な条件が

あって、それが微妙な働きをしているのです。同じように育てたのに全く異なった人間になってしまっても、決して不思議ではないのです。

だから、人間の教育においては、「このような育て方をすれば、必ずこのような立派な子供になる」と言えるような教育法はこの世に存在しない、ということです。ただ「このような育て方をすれば良い子になる可能性が高い」ということだけに過ぎません。この事実は、教育には明らかに限界があることを私たちに教えてくれています。

前に述べた「何もせずに放っておいたのに良い子になった」という例も、そういう意味であり得るのですが、「だから、放っておいたほう

コラム

豆知識

首と頸

頁(アタマ)の上に髪のを加えた字。“あたま”が本義。戦場で敵の首(アタマ)を取る場合、切り落とすのが頸なので、首が頸の意味になった。「首府・首相」の首は「頭」の意味。「頸」が本当のくびなので「頸飾」と書く。

が良い」ということにならないことは、言うまでもなくお判りのことと思います。

放っておいても良くなることの可能性は極めて低いのですから、それを期待してはいけません。かと言って、わが子の教育に努力したのにその結果が良くなかった、と言って天を恨むのも間違っています。

“人事を尽して天命を待つ”
 という諺がありますように、人は、人として出来る最善の努力を尽くすべきであって、その結果の善し悪しは天命に任せるしかないのです。それなのに世の中には「放っておいて良くなる」ことを期待し、力の出

し惜しみをする人の何と多いことでしょう。

最小の努力で最大の結果を得ることが最良だ、と思っているのかも知れませんが、無駄を省けばそれだけ残る物質とは違い、人間の精力は使えば使うほど湧き出てくるものです。使わないでいると、その分が残るところか、遂に萎縮してしまいます。だから、力の出し惜しみくらいもったいないことはありません。我こそは“最高の教師”であるという自信を持って、最善の努力を尽してください。

コラム

部首 力

手を下におろした形。実際に力を出して仕事をする手を下す、と言う。

【動】 重い物でも力を加えれば“うごく”という意味。

【勉】 免と力の会意形声字。𠂔は人のお尻を表し、さらに人を加えて“子を生む”意味を表しているのが免。よって勉は“分娩の時に力む”のが本義。

コラム

部首 止

右足の裏を象ったもの。ここが地面にぴったりと着いて“立ち止まる”ことから“とどまる”という意味になった。

【正】 一と止との会意字。“人の止まるべき線”“守るべき基準”のこと。

【足】 (ひざ小僧の象形)から足の裏(止)までの部分のこと。“あし”だが、ひざから上は含まないのが本義。